

建設産業図書館

開設二〇周年を迎えて

心に残る人たち

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館事務局

江口 知秀



Tomohide Eguchi

はじめに

建設産業図書館（以下、当館）は、東日本建設業保証株式会社創立五〇周年記念事業の一環として、平成十四年十一月一日に開設した建設に関する専門図書館であり、本年で二〇周年を迎えた。

公共図書館と同じくどなたでも無料で利用できる広く一般に開かれた図書館である。

開設当初は利用者が、一人もいないという日もざらにあったが、徐々に利用者数が伸びていき、令和元年度には一日当たり約二〇人を数えるまでとなった。

その後、新型コロナウイルス感染症拡大のため、利用者数は急激に落ち込んだが、昨年度あたりから徐々に回復しており、引き続き館内衛生環境に配慮しつつ運営していきたいと考えている。

さて、開設から二〇年を振り返って、私ごとではあるが心に残る人たちについて述べてみたい。私は図書館の専属職員のような位置づけで、

平成十二年に採用され、それから二〇年以上を当館で過ごしてき、多くの人との出会いと別れを経験した。それらの方々の中でも、特に二人の方が今でも心に残っている。

菊岡俱也先生

菊岡俱也先生は、もともとは旧建設省建築研究所や（財）日本建築センターの資料室に勤務され、その後は独立して建設文化研究所を設立した在野の研究者だった。建設産業に深い造詣を持ち、かつ建設関連資料に精通していたことから、当館設立構想委員会のメンバーに委嘱され、後に当館の初代館長に就任された。

痩せて小柄な体格ではあったが、声はやたらと大きく、近づくと古い本のような匂いがした。当館には週一回、毎週木曜日に出動していたが、月曜日はS会社、火曜日はN団体と当館以外の組織での仕事を毎日かけもちしていた。先生は私のことを「珍獣、珍獣」と呼び、「江口く

んには、俺と同じような生き方はしてほしくないなあ」と時々漏らしていた。三〇歳まで定職に就かず、当社に採用されたのちも組織に馴染み切れない私を、同じく珍獣である自分と重ねていたのかもしれない。

先生から面と向かって何かを教わったことはないが、人はどのような生き方をしてもいいのだということとを、言葉ではなく示してくれた。もちろん、先生のような才覚もない私は、彼のように裸一貫で生きていくことはできないが、その生きる姿は私の支えとなった。

平成十八年、先生は在任中に病に倒れた。日本建築学会の委員会の帰りに、おぼつかない足取りを心配し、送っていくといった私の申し出を「大丈夫だ」と断って、改札に消えていった姿が最後となった。

大河内正興さん

大河内正興さんは、元は大手ゼネコンの設計部署の資料室で長く勤務されており、当館開設の準備段

階から囁託的な立場として招かれた。菊岡先生が立案した当館のコンセプトを実務レベルに落とし込む役割を担うためだった。

その年代の人としては長身で足が長く、一見して誰もが紳士という言葉を思い浮かべる容貌をしていた。いたって真面目で、ギョロツとした大きな目玉が表す通りの頑固な性格だったが、けっして堅物というわけでもなく、たぶんに愛嬌を持ち合わせている人物だとわかったのは、初対面から一週間ほど経ってからのことだったと思う。それまでは、こんな偏屈そうなじいさんややっていけるのかと、憂鬱な日々を過ごしていた。

それから程なくして、昼休みに隅田川の橋を見に行かないかと誘われるようになった。図書館の開設準備室があった八丁堀の東京建設会館からは、歩いていける距離だった。なんで橋なんか見に行くのかわからなかったが、はじめて見た隅田川の橋梁群には目が覚める思いがした。

「これは中央部が開くんだよ」と教えられた勝鬃橋。重厚なアーチを描く永代橋。とても日本の橋とは思えない清州橋の姿など、毎日少しずつ上流に遡って歩き、橋の博物館と言われる隅田川の橋梁群を見て歩いた。思えば、これが建設に興味をもつきっかけとなった気がする。

「今日は少し遠いから、会社の人には内緒で、少し早く昼ごはんをたべて出発しようよ」などと、いたずらっぽい笑顔を浮かべる彼には、なんとも言われぬ親しみを感じた。

ある時は、早稲田大学のオープンカレッジで建築史の講義があるから、一緒に受けなかと誘われた。休日の講義ではあったが、終わってから彼と一杯やるのが楽しみだった。

彼はこのようにして、私が建設に興味をもつように仕向けてくれたのではないかと思う。お互いに我が強い性格なので、こいつには頭ごなしに何かを教え込むのは無理だろうと察したのかもしれない。当社での定年を迎えたのちは、

「僕は辞めた後は図書館に働くことはないよ。OBがうろろろするなんて迷惑だろうからね」などとうそぶいていたとおおり、それっきりとなった。

おわりに

菊岡先生も大河内さんも、より良い図書館をつくることを目指す同士だった。彼らは在職中、それぞれの思いを私に託すべく色々配慮してくださっていた。開館当初は三〇歳そこそこだった私も五〇歳を超える年齢となり、二人が図書館を去った後も、なんとかこれまでやっていくことができたのは、多くの人に支えられたことはもちろん、彼らとともに作り育てた当館への愛情を持ち得たことが大きかったと感じる。

私がどのような形で当館を去ることになるかはわからないが、私の次を担う人に彼らとともにした当館へ対する思いを託すことができれば幸せだと思う。